イイダコ資源回復に関する研究

○中山博志・原佐登子・明石英幹（増養殖部門）

【目的】

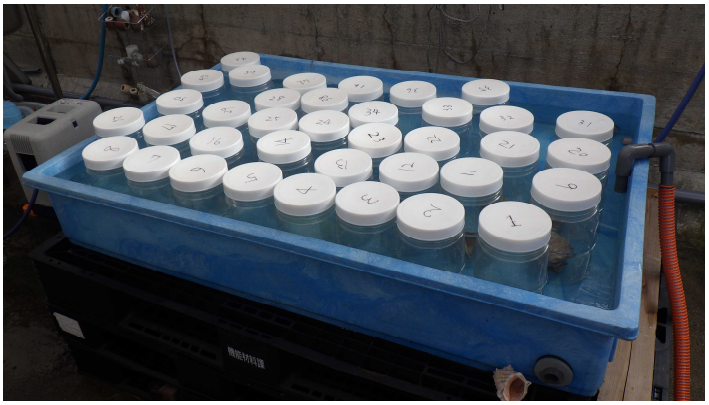
イイダコは、小型機船底びき網漁業で秋から冬にかけて漁獲される本県の重要な水産資源である。しかし、近年は漁獲量が大きく減少しておりイイダコ資源の回復が急務である。

これまでの研究により、イイダコのふ化直前の卵の放流及びふ化した稚イイダコの放流が有効であることが判明していることから、安定的かつ効率的に抱卵イイダコ及びふ化した稚イイダコを飼育する技術開発を目的とする研究を行った。

【方法】

令和５年２月に、抱卵イイダコ 1,864 個体を水産試験場の水槽へ搬送し、一時的に飼育したうえで各種試験に供した。

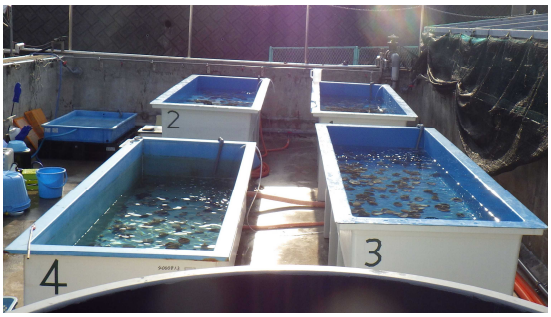
抱卵イイダコの個別飼育試験では、3L 広口瓶に穴をあけた容器にアカニシ等の貝殻とともに抱卵イイダコを収容し、ろ過海水を注水して飼育した。（写真 1、2）



（写真 1）水深約 20 ㎝の水槽に並べて飼育

（写真 2）使用した容器

飼育密度による生残率の比較試験では、底面積 3 ㎡の水槽４基に異なる飼育密度で抱卵イイダコを収容し、ろ過海水を注水して飼育した。それぞれの試験について、一定期間飼育した後に生残率を比較した。（写真 3、4）



（写真 3）飼育に供した水槽

（写真 4）300 個体収容した様子

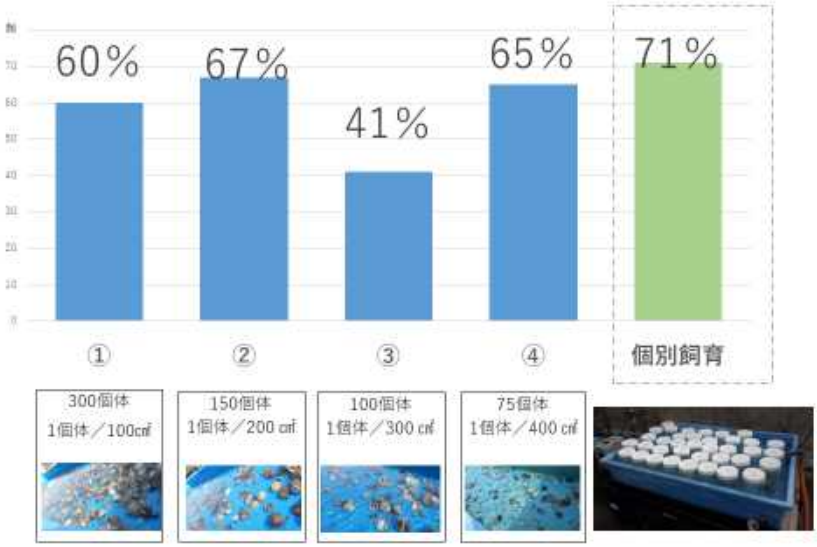
ふ化した稚イイダコの飼育方法の検討については、貝殻に卵を産んだ親イイダコ 56 個体を水産試験場の水槽で継続飼育し、稚イイダコを得た。ふ化した稚イイダコは４基の水槽に分養し、飼育に適した餌料の検討等を行った。（写真 5、6）

（写真 5）ふ化した稚イイダコ

（写真 6）摂餌の様子

【結果】

抱卵イイダコの個別飼育試験の生残率は 71%であった。飼育密度による生残率の比較では、飼育密度と生残率に相関関係は得られなかった。（図 1）



（図 1）生残率の比較

これは、試験に供した抱卵イイダコの活力に問題があったものと考えられた。抱卵イイダコ 730 個体が産んだ卵（約 20 万粒）を、親イイダコと共に貝殻ごと多度津沖に放流した。（写真 7、8）

（写真 7）貝殻に産卵したイイダコ

（写真 8）放流の様子

ふ化した稚イイダコの飼育に適した餌料については、冷凍アキアミ、冷凍カタクチイワシシラスや、魚肉を刻んだものが有効であることを確認した。外套膜長 5～16 ㎜に成長した稚イイダコを屋島湾に 1,000 個体放流した。（写真 9、10）

（写真 9）放流した稚イイダコ

（写真 10）放流の様子